赤ちゃんの抱っこ、上手にできるかな

体験にまさるものなし　赤ちゃんに学ぶ

昨年11月、東京都**武蔵野市立第二中学校**（校長：佐藤敏数）で、心温まるユニークな授業が行われました。その名も「赤ちゃんふれあい体験授業」。コロナ禍で人と関わる機会が減ってしまった子どもたちに、赤ちゃんとふれあうことで「人の温もりを感じてほしい」、そんな思いから、同校の先生方が企画し実現したものです。

授業の実施にあたって力を貸してくれたのが、地域住民と学校をつなぐ役割を担う地域コーディネーターや、30年近く武蔵野市で子育て支援を続けてきた「**NPO法人ひまわりママ**」（理事長：土屋美恵子）の皆さんでした。

最大の難関は、〝赤ちゃん〟を探すこと。地域コーディネーター・ひまわりママの皆さんは、保育園やコミュニティーセンター、さらには地域のイベントやスーパーの前などでもチラシを配り、赤ちゃん連れのママさんたちに直接授業への参加を呼びかけました。そのおかげで、「うちの子もやがては中学生になるから」と、妊婦さんや赤ちゃん連れの親子、合わせて22組が快く協力してくださいました。

授業当日、3年生の生徒たちは、赤ちゃんを抱っこしたり、ママさんたちの出産や育児の話に耳を傾けました。最近ではきょうだいがいない子も多く、近所の子どもと遊ぶ機会も減っているため、赤ちゃんに接するのは初めての生徒も。最初は恐る恐る抱っこしていた生徒たちも、その小さな体から伝わる体温ややわらかな重みにふれていくうちに、自然と笑顔がこぼれ、優しい気持ちが生まれていきました。

もちろん、赤ちゃんはただかわいいだけではありません。急に泣き出したり、動き回ったりと、目が離せない存在。生徒たちは、子育ての大変さも肌で感じました。また、妊婦さんの体の重さを体感する「妊婦ジャケット」の着用体験をした男子生徒は、その動きづらさに驚き、「マタニティマークや優先席の大切さを改めて感じた」と語っています。

こうした経験を通し、電車やバスの中で妊婦さんや赤ちゃん連れの方を見かけたら、思いやりをもって接しようとの気持ちが生まれ、自分も周りの温かさに守られてきたのだと、これまで自分を育ててくれた家族への感謝の心も、自然と芽生えたようです。

先生たちの情熱と、地域の方々の協力によって生まれたふれあい授業。「小さな命」が大きな学びを与えてくれました。

武蔵野支部の総会で「小さな親切」実行章を受ける「ひまわりママ」の土屋理事長。武蔵野市の小美濃市長（左から2番目）、髙橋支部代表（右端）とともに